



陽定藏

此
主
其
与
依
在
と

ふ
ろ
ろ
ろ

は
の
り
帰
り
し
ん

多
の
り
子

おとしし亥乃下秋十三日
百人能句を州序の客に
已の句を主とし了新回一
夜を心吟了奈寸



九月十三夜

漢土に留士河久後能月見光 素堂

二神乃御坐給ふ此地波山

み

筑波根乃此地言一後の舟 嵐棠

世小めてきき山の行空よ

里十三夜の月能出ると

離れしととたふきてる後の舟 素磔

半夜半晴

千里をくくつとを遙く後の月 冷々

陰奥の御のやうに

氏務出く筈のき六月十三夜 曉臺
つらき今年を経てや右の月 素磔

○

十三夜曉言志はく免可れ 濁子
後乃月誰の方の言とえん 半化

時の首さくさくやふ言や十三夜 素磔

○

切未る言かられは中後乃月 半化
海山をさえへて後れ月見哉 去未
久うこれ月のうらや後の月 素磔

○

後の月あう乃出を交の浦千言 弘氏
必路言の義ぬくやう小右の月 其角

この世乃二度世に出る月見が 素稜

○

台老月松ハ早き木の葉ふれ 希言

山茶花の木乃宵見せらるる台の月 菫村

うはふさきこ葉の袖ふや台の月 素稜

寄芭蕉公翁

「おのまよひ」の彼庵に月夜も

くわさひこゝの人のあはれさへ

僧のまあるもわらうれの月よ

帰きまの月の瘦もよきあはれ

ふさと詠しらうしととも又

月の光とて庵をさぬ松の白

象深とて光さるるかたの所

くさつて了頃の思ひ出に

光や成魚

け度八月小把了や帰里な人 素堂

以先へ文やるもては存見哉 岱水
二款さ小分ても麻さ一右の月 素磔

良夜月なく十三款時暗くは

恐る一八月ハあし新の月 冷々

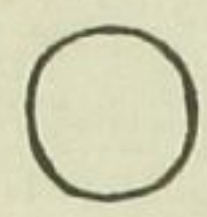
六と一も中投の存ハ公ようら

二又又ハあまかたさくもれく

七又あしと後又書に新あ

わくこいしあはるあねもたれぬ

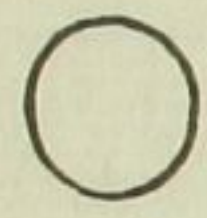
富士の境波二款は月と一款は 素堂
十又款は夢のさるえら里右の月 素磔



見りし之層やまもしる後乃月 標良

十三款すこ音あつらゝ家井式 石菊

さく見えは世にまけ之右の月 素磔



月影やくく候きしは細崎 其角

大佛をいさく赤良にて右の月 白圖
夜の深し何変く覚ん右の月 素染

○
二夜は月東海道地通つぬき 北鯤
二夜おつ月見るまに生れを 文北
二つ阿る淋しさは後の月 素染

○
雲原に隠れもやうは右乃月 紀鳳

はつきはら煉るまていつく右の月 嵐紫
志らくは去年の空は後の月 素染

○
山一重二折乃月や甲斐民話 白雄
三越路の名にあそさおれ右の月 左琴
野にく人山ふくは後の月 素染

一水二月千水十月とふお古り
にすかきとあそひつるの月をいふ

袖につま小家分衣存りし
素堂
公見不竿と文を也流の月
其角
白糸流言其れをよし後の月
素磔

梅色流田に立人を月見う家
士朗
魚こまし人を流りる後の月
白雄
人成不流の月見る山家式
素磔

古流りそ神といは細神

里小相る

瘦果一麻の出にりる月一物
魚心
麻鳴き猫、相寄れ十三夜
嵐雪
月に怖て麻を鳴ぬり十三夜
素磔

あさあさき文流上あさも後の月
喜年
死高川地流ふしつ流ぬ右の月
百堂
秋也申く終や又終る十三夜
素磔

仲穂はなはらうれの里狭谷山
にふくさるるの程ありれはのめに
もたふすすむらうち月十二夜にお
まぬらう多きころとのせめ
こみとのりなせふなむせとをわ
し後れ月阿るハ二夜のみお
こふのさきと文人の風雅をく
ふふれも宋人ののりあふま

そのころは山阿弥孫麻もつす
きかころ人くをす孫さあれを
峯はあつてはと繪と諺と傳の家の
素氣は山もみれ一編よこころん
二ふ扇とつみ唐哥いじぬわがれ
ころとたつた月さるを隣女の上に
うけてけの巻れもてあーとすお
客ふかーちう吹上とかいせはれ

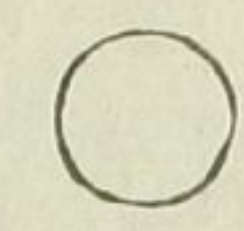
八月廿一きんさく入るやうにて
中へ申すもいふもいふもいふも

相志里ふんさひくう後純月 蚊足
后乃月すまへん字の書なぶん 越人
稀ふ日稀ふ月夜に十三夜 素朶

母と月見らるるに

歳一す練てやふやさん后の月 其角
歳一す練てやふやさん后の月 恭雄

見ぬ人も心も是まで右の月 素朶



后乃月いかふも古き所よまら 猿丸
昔すきぬ心や月流十三夜 素堂
月ねしむおや長月の長くか 素朶

十又お十三夜とあつた年
山海の辺を以御して

うらやまし新神をうり月の客 敬雨

十又叔も雨あまける十三夜も

降られハ

又の月もあまのひておそ甲斐あれ
鬼貫
比乃寂しさを免て右洗月
素磔

同隠相求とふ心哉

棕れ木のむく香あらし月と身
素堂
この日教人あきるる後の月
長翠
初月ハいつて何しそ後の月
素磔

○

十又叔小生し月を十三夜
江戸素外
時くは十又叔おもへ十三夜
仙化
似く月洗中よる後の月叔が
素磔

○

松風の時雨あらしや後の月
杜稟
板鳴子枕小枯る月見哉
孤屋
今宵とていつく袖あま右の月
素磔

おかしも例のあひへのかきをし
つもの詠文にかきて美人亭
島屋あとしとまけふまうひ
抱て日比侍とらるるふふ又には
とて杖笠のあするふあとしと
又をさしあけらる小坂のさと
昌精舎に彼も通る後壻なやと
評して和歌あめくさあきもたは

あきさきらふあれは行くとき
はともは猿も枕やあてんと
二三葉にそもさきほめて

天竺て今習わのきん後の月 斗入

かの婢君は為更科れ里小徳
ととめて一佛子の縁をいともや

まよいしあ陰流の後の月
の月あけらるるあて後の月
素外
素磔

○

満る物とわくえて月此名残が 柳莊
新二叔とらぬ程見る月折が 秋風
心もゆとらちとる後の月よが 素稜

細井某世と後て庵造もむつと

とてある農夫此家ふ又の住居して

主とも誰とも尺へはゆらるとるて

似合しや屋素折きて後の月 依水

一つかき木絨草ふや後の月 木鶏

わたりは州小寄のちるぬ十三枚 素稜

甲斐及地草庵と出く志あつ

玉小飯すまひ寸長月の月のこと

あきにくく味ひ味て折ふ物

もつて更にいれ、山の端通て

あつとぬやくもあつと

おとーらき同音ふもあへり十三枚 石牙

月時の曉也詠し十三歌 斗睡
光輝したる言ハある十三歌 素檠

水かれて池のひつゝや後の月 菴村
水日夜水にせまると後の月 曉臺
不定あき秋の衣れや後の月 素檠

山寺小菴にて
信也僧とてさわれて後の月 嵐棠

つゝ乃もつや寺も疎らぬ十三歌 江雲
あうぬ戸を肉く叩くや月一歌 素檠

天鏡をひく針ぬきもせむき人
もあし川口の扉あは絲枯ぬ
へくも何れも不破の扉あは絲ハ
編妻の出せもあはし一也一也
登をぬく登人をあはし一也一也

あはしものらと秋の曉や後の月 巢北

櫻さし此鞘小糸新阿尾後の月 正秀
立く心も枯て右の月 素榮

蜀中秋定さして又暖あり

お力成さても志のけし後の月 宗波
姨石を暖免中せ後の月 孤屋
和ら小日る為あて後の月 素榮

○
お取みさして拍と思し後の月 仙化

後乃月あよ里書記や井が 標良
中途おく久しを成ぬ右の月 素榮

○
高み糸飾立てる後洗月 半残
月見して仲おるもちれあともか 芸門
そとちおふや秋ば葉の十三夜 素榮

甲斐のふれ物ハ古き書小も
又へこれと今ハ名のとあん終也

るは小菟壇とつふ所おたやう
けにや日をもれぬめを也や
とるひとりにもあつてあおし
のぬせやお屋とる月の影を
におのし

後乃月跡山小残る弱の勢
涼岱
即ち山も程言めて後の月
乙由
是さすれ跡小是程の十三夜
素磔



はぐ子とよあふくつてや后月
其角
十三夜松ふお髪の見申るまで
隆之
是破きてもあやうなるハ十三夜
素磔

この秋も月を悟る
月影と名残ふのこせ長柄川
自樂
后乃月長き今年れ命下る家
丈芝
後の月見える下は小成にん電
素磔

○
子控乃一ノ本里来て後の月 文甫
見るやつ家分ひそく一ノ里後の月 吳山
くよく人をねまはまといふ十三日 素檠

○
約米乃長者一ノ里後の月 阿上
泊る守てひと里米まゝ十三日 葦村
何見えも後ふたあるや後の月 素檠

本庄の物見ふて

○
家深とえて米一ノ里後の月 長翠
家深乃会款の爲米もや後の月 巢北
後の月名残と先ふえる物哉 素檠

○
ふ沙汰ある本様ふ色ぬ後の月 利牛
後の月稲垣ひらきお相まうふ 白雄
ふ控はくも月純下地十三日 素檠

西ぬすすさくられ

阿ーがぬふを又おらるる月の

隣霞

後の月も何その名残り

士朗

とせをのそとて後の月見が

素檠

○

曉世の言を申の里や十三夜

友五

曉ハまとのやおや後純 月

青蘿

秋の日を思ハする 物や十三夜

素檠

三善法師の屍を又てかあーめ

の影いふ侍ぬと留里を去る

の十里志とく月夜ありふも

ひて志とくおおとえとあー

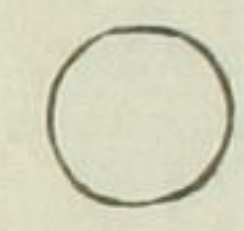
むのー髪をとさけておー

なの里ふなをすくあくあくと

あくなくさあー秋ふらじ

物ささつて人をみちちむ月見が 曾良

家出河川木立をうきし後の月 其角
よく又れい家物守る後の月 素磔



蕙ふもちきりあるもや右れ月 秋風
月二物くらぬるものもんあり 長翠
よんへまで阿の月あはれ十二物 素磔

夢の棧幾津もあへて後の月
にめをさえいよハ木音啼き地

うしあやうや

そう木音幾津もうきし後の月 涼菟
赤才ハ木魚に似てる月又いふ家 宗波
才一志ハ木魚えきと音後の月 素磔

十二物月と賞するもハ家
日の花との風流ハる也

唐人よあけふ色く後志月 菴村
出立合羽物とまきて後の月 入楚

能得乃二十日月也后此月

素榮

今者此月おめくおめの上の
足ん子もいおしくておらる
あつらわさや後もきとて免
はる草枕とま福ひて芭蕉を
あまの曾良はあに男もき
かよのふちもいさふはし同の
とて垣梅と後て杖ふあらし枯

飯とほんで肘にけ望国を旅
人を能る物てすこゝと河原に
いさふ清光物とあふは草
物すりふ秋をあふとすめ旅
厂あられ友とあふとさうに
とあふるは本母寺は六の水
西ふもきぬ

いつもかく旅人もあふは右の月

嵐榮

十三夜旅にてふくと古んを

磯子に

後の月松やされうら江戸の産 其角

十三夜わすれぬ月影出る物哉 素壁

○

多れーさや二枚の月ふ葉添て 素堂

菊池後おふさふーはふ忠有 支考

志らふ葉も一枚の名之十三夜 素壁

干

○

後の月心つく神々そ純赤のら 青阿

さひしきや後の一字と月の影 岱青

今まで城今志る後の月物哉 素壁

此吟也磔居士對月明所作
文化丙子孟春釋月潮撰焉



蕉門書林

皇都寺町通二條
榻屋治兵衛梓

